怒って、両手の石杖を天

土記伝説 探訪

石動の鬼の杖

石五、 (賑岡町)】 【石の伝説 鬼の杖

く長く、左は細く短かっ 鬼が棲み、 杖を持っていた。右は太 にあり、昔 岩殿山に赤 岩殿の石道(大田ヶ原) 或る時、鬼は何かに 常に両手に石

庭前の石の上で切腹した。経たが世に出る便も無く、

う人の家にかくれ、年を 強瀬の仁科九郎衛門とい 某という人が落ちぶれて、

【腹切り石(賑岡町)

強瀬にあり、

のもので、地下に埋まっ畑六十糎、厚さ二十四糎地上の長さ二メートル、大でこれを鬼の杖という。 立っているのが赤鬼の左西に向け、地中深く突き の石道(石道)と呼ぶ地麓から一キロばかりの東 という。この杖よりも更 跡が明らかについている 手の拇指、食指、中指のわれ、石の上部には鬼の ている部分は無限だとい の桑畑の中に、柄の方を 震のように震えた。今山きは雷の如く、大地は地 いる右杖は、はるか西方 に太くて長いといわれて 高く投げ、その落ちた響

んで、この石に注げば良には、ただ桂川の水を汲 る時は、事前に必ず耳の 遺言をして、「わが追善 ある蛇が現れたという。 いい、後に何か変事があ る。」といった。 れば、あらかじめ知らせ い。万一この家に変事あ この石を、腹切り石と

が折れたので、その一片坂にある。昔山姥が杖 鬼の杖と呼ばれている。 片は岩殿山の麓にあって をここに捨てた。他の一 【立石(笹子町)】

ら流れてきたものだとい もあったが、明治四十 のかも知れないという人 ろう。神様が運んで来た 四メートル)横五間(九 の大水害の時、大鹿川 石を誰が運んで来たのだ 岩である。このような大 メートル)あって、花崗 あり、長さ八間(十四, 【白野の大石(笹子町)】 白野の子の神社付近に

から初狩に不思議と 貝

石・競べ石で、貝石は 高さ二メートル位、長さ 根石・蚕種石・木の葉 石・玉子石・柱石・矢の 獣を射殺したとのことで 根につけて弓を作り、野 以上もある。矢の根石は メートルから二メートル 直径三十糎位、長さ一 は六角形の柱型の石で、 五メートル位ある。柱石 形そっくりの大きな石で 形の化石で、玉子石は卵 呼ばれる石があり、 毎年五月中旬、蚕を 鎮西八郎為朝が矢の

< ふだん灰色の大石が、青 石は、ナラ、又はソロの 家はこの石を見て、蚕の が、風化してボロボロ落 化石が岩に付着している 掃立を用意する。木の葉 寸前と同色になり、養蚕 い昔と共に蚕の稚蚕掃立 掃き立てる頃になると、 ある。蚕種石は、名の如

みたところ、さらに不思 を聞き、従者に命じて谷 秋元但馬守が、このこと 出来たとのこと、かって の段にか合わせることが 段々で、何人でも必ずど 位い岩で、十七段位の べをしたとのこと、八米 人に至る何人でも背くら ち笹子川の北岸にある。 競べ石は、幼児から老

卵子石

来であり、網本の地名がという。之が天狗岩の由の網を渡って遊びに来た これから起こったという。 らの部落へ網を張り、 でいて、その岩からこち のてっぺんに天狗が棲ん 人々が寝しずまると、そ えている岩で、昔この岩 網本の河原の向側の聳【天狗岩(梁川町)】 夜

【鬼面岩(大月町)】

に行ンヤ」と云えば、軽のをここにおさめたもの う。昔 岩殿山で拾った さ四十糎程の石で、鼻も く上がるといわれている。 いる。俗に鬼ずら石とい 目もあり人間の顔に似て 三島神社にあり、 大き

てた院周辺橋上から投棄 立て、谷村から約千米隔 させたという。

真木のコンドウ丸とい**【鏡が池(大月)】**



にあり、昔 岩殿山頂に 大月と猿橋の境(駒橋)

こにも小山田氏の烽火台峰火台の中心があり、こ があったといわれている。 水の伝説【亀ヶ池

岡町)】

だが、昔から干天の時に、なる池があるのも不思議 この池の下に馬洗いの池 が降るといわれている。 この池をさらんば必ず雨 の頂上近くに、飲料水に できる。このような岩山 湧き出ており飲むことが 水で、現在もこんこんと 田の城があった時の飲用 岩殿山上にあり、小山

【硯水(賑岡町)】

い伝えがある。

面が凹んだ石に集まって、が湧き出し、その傍の表な花崗岩の割れ目から水 もあふれず、古来これを 干天にも涸れず大降りに の八合目辺にある。大き ら約八キロ、雁ケ腹摺山大月町真木の間明野か



為朝が伊豆から来て、こ が茂っているが昔、鎮西 ある。今は埋もれて菰草

これはかっての為朝の夫 も拾い出したが、これを なおこの池から水晶 これを鏡ケ池ともいう。 丸」といい、付近にお馬 それでこの池を「鎮西ケ 雨が降ったといわれてい お玉と称し、早魃の時こ 自殺したものだといわれ から古鏡が一面出たので もある。またこの池の中 冷し場、菜畑という地名 の辺に庵を結んでいた。 人、侍女などがこの池で の玉

ころ、たまたま矢を射っ て、池になったというい ところから泉が湧き出し 西八郎為朝がここに逃れ たら、その突きささった 水がなくて困っていたと てきて、居を構えたが、 滝子山上にあり昔、【鎮西池(初狩町)】 鎮

「大月市の石造物Ⅱ」参考文献

執筆者

井 上

文次郎

一月号へつづく…